

## 議事録：食品に関するリスクコミュニケーション「一緒に未来を考える～食品中の放射性物質～」(2022年3月3日)

### 4. 意見交換（パネルディスカッション及び質疑応答）

○葛西氏（コーディネーター）

皆様こんにちは。本日のコーディネーターを務めます、葛西賀子と申します。

私は青森県の出身でして、振り出しはふるさと青森のアナウンサー兼報道記者でございました。青森には六ヶ所村という所に再処理工場がございますし、それから東通原発、大間原発、下北半島にたくさん原子力関連施設が集中しているということがございます。そこで記者を兼務してキャスターをしていたときに、Sv、Bqといった今までずっと出てきた言葉を、その何十年か前の当時からたくさん聞いて触れていたのです。

そこで東日本震災の翌年、2012年ですけれども、福島県内の道の駅などの販売員の方々に、きちんと測って基準値以下のものしか流通していませんよという話を、分かりやすく不信感を抱かせないように説明してほしいという、その講師で伺いました。そのときが福島県と初めてのお付き合いということで、その後、原発事故で避難指示を受けた福島県浜通り地方の住民の皆さんが、除染をしておうちに帰るというときに、帰還に向けた住民対話というものの司会、ファシリテーターとして5年以上、50回以上、田村市都路地区から始まって、川内村、葛尾村、川俣町山木屋地区、飯館村、浪江町、大熊町、双葉町など本当にたくさんの所に行かせていただいて、お手伝いをさせていただいております。そういったところから、今日はこのコーディネーターというお席に呼ばれたのかなと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、今日はそれぞれの分野で御活躍されていらっしゃる皆様が、リモートも含めて一堂に会しているというめったにない機会でございます。ぜひ活発な意見交換にできればと考えています。

では早速、パネリストの皆様を御紹介いたします。

先ほど基調講演をしてくださいました、産業医科大学の樫田先生です。

○樫田氏（産業医科大学）

樫田です。よろしくお願い致します。

○葛西氏（コーディネーター）

福島県いわき市でトマト栽培や観光農園の運営などを手掛けていらっしゃる、株式会社ワンダーファーム 代表取締役 元木寛さんです。お願いします。

○元木氏（株式会社ワンダーファーム）

皆さん、こんにちは。今日は福島県いわき市から参加をさせていただいております。どうぞよろしくお願い致します。

○葛西氏（コーディネーター）

続いて、恵比寿にある老舗ビストロの料理長で福島県産の食材を様々なアレンジで提供して人気を博していらっしゃいます、ビストロダブル、チーフシェフの無藤哲弥さんです。よろしくお願ひします。

○無藤氏（ビストロダブル）  
よろしくお願ひします。

○葛西氏（コーディネーター）  
消費者専門雑誌の記者として、食品、医薬品に関する取材や記事執筆に従事され、現在は公益社団法人日本消費生活アドバイザー・コンサルタント・相談員協会 食生活委員会委員で御活躍されています、武士侯淑恵さんです。よろしくお願ひします。

○武士侯氏（日本消費生活アドバイザー・コンサルタント・相談員協会食生活委員会委員）  
武士侯と申します。よろしくお願ひいたします。

○葛西氏（コーディネーター）  
パネリストの皆様、どうぞよろしくお願ひいたします。

さて、東日本大震災と、それに続く東京電力福島第一原子力発電所事故の発生からもう10年あまり、まもなく11年が経とうとしています。この間、放射性物質に関しましてはそれぞれの立場で様々な取り組みがされてこられまして、そういったことが現在の形に結びついているのではないかと思います。

そこで、生産者の元木さんですけれども、元木さんは福島県のいわき市でトマトの大規模栽培、それからトマトの加工工場、ビュッフェレストランと、農業と食と全て体験できるというところを運営されているんですけれども、元木さん、実際に生産現場で放射能の低減対策ってたくさん農家の皆さんやっこられたと思うんですけれども、まずその辺りの実際の取り組み、今までどんなことをやっこられたかというのを教えていただけますでしょうか。

○元木氏（株式会社ワンダーファーム）

私ども、福島県いわき市四倉町という所で1年中トマトを栽培しているトマト農家なんですけれども、ちょうど福島県の第一原発から約50kmの所に位置しております。震災当時、私どもはいわゆるハウスでトマトを栽培していましたので、震災があった2011年3月の下旬から、いわゆる放射性物質検査というのをいち早く開始をして、その後毎月、先ほど櫻田先生のお話にもあったゲルマニウム半導体検査機による放射性物質の検査というものをやっこまいりました。ハウスで栽培しているということもあり、一度も基準値をオーバーするという事は、私どものハウスに関してはなかったんですけれども、どうしても出荷先から受け入れをしてもらうために11年たった今も、当時よりは簡易的な検査、NaIシンチレータという簡易的な検査なんですけれども、それを今も検査をしているという状況です。

○葛西氏（コーディネーター）

元木さんのところは大規模ハウスですけれども、農家の方々によってはコメ農家の方っていうのは、その他にもいろいろ転地ですとかやっていたらと聞いたんですが。

○元木氏（株式会社ワンダーファーム）

おっしゃるとおり、先ほど農水省さんの御説明でもあった、いわゆるカリウム施肥ですとか、いわゆる天地返しとって、反転耕地とも言ってるんですけども、トラクターで表面の部分の土と深層部分の土を入れ替えるという作業で、あとは福島県といえば果物が有名な県ですので、果樹農家さんに関しましては果樹の木の樹皮、いわゆる木の皮の部分をはいで放射性物質をそぎ落とす、果実に放射性物質が移行しないようにというような努力をこれまでやってきております。

○葛西氏（コーディネーター）

そうやって、まもなく 11 年ですけれども、ずっと努力されてこられて、現在流通管理されているものというのは、放射性物質が基準値を超えるものはないんですけども、でも昨年からはコロナ対策、こっちのほうが出てきていますが、生トマトって厳しい状況なんじゃないかと思うんですが、いかがですか。

○元木氏（株式会社ワンダーファーム）

やはり飲食店向けも一定割合あったので、コロナで出荷先が減ってしまっているということもありますし、あとは私どもも農園レストランを運営しておりますので、農園レストランへのお客様も今激減しているという状況にはなっております。

○葛西氏（コーディネーター）

やっと放射性物質の対策に目途がついてきたところで、今度はコロナということですね。何か現状打開というのをやっていたらと聞きますよね？

○元木氏（株式会社ワンダーファーム）

もちろん、これまでやってきた放射性物質検査の実施であったり、その開示に加えまして、やはり 10 年もたってくると福島で作られたものが放射能うんぬんで安全か危険かというお話よりも、今や誰がどんな作物を作っているかということのほうが非常に重要になってきていて、いわゆる福島でトマトを作っている元木、私に会いに行きたい、私が作っているトマトを食べたいと思っていただけるような、いろんな農業体験の企画であったり、観光ツーリズムの企画であったり、そういったいわゆるプラスの面をどんどん新しい取り組みとして実施をして発信をしていくということ、今やらせていただいています。

○葛西氏（コーディネーター）

ありがとうございます。今も後ろ、随分トマトたわわですね。

○元木氏（株式会社ワンダーファーム）

そうです。これは実際、今のうちのトマトのハウスの中の栽培風景です。

○葛西氏（コーディネーター）

ありがとうございます。また後ほど伺います。

生産者の元木さんからお話を今伺ったんですけれども、今度は東京恵比寿で老舗ビストロのチーフシェフ、ビストロダブルの料理長の無藤さんにお話を伺いたいと思うんですが、無藤さんは福島県の浜通り地方の生産者の食材を様々なアレンジして、おいしいお料理を提供していると伺っているんですが、まず3つ聞きたいんですけれども、被災地のそういう製品を取り扱うようになったきっかけをまず1つ。それから、現在お出ししてて、お客様の反応とか状況はいかがかなということと、それから今元木さんの話がありましたけれども、生産者の皆さんの努力をどんなふう感じていらっしゃるか、その3つをまとめてお願いします。

○無藤氏（ビストロダブル）

まず、この東北の食材に出会うきっかけというのは、もともとは宮城県のほうで生産者さんツアーというのがあったんですね。いわゆる食材探しツアーというのがあって、それに参加しまして、その後ちょうど福島の農家さん、漁師さん、それと宮城県のほうでも若手の、元木さんもそうなんですけど、このままじゃいけない、いろいろ頑張っていこうよという人たちって結構横のつながりがあって、それで福島の食材もちょっと紹介されるようになって、福島をくるくるとその後回ったんですけれども、それでいろんなところでいろいろ試食をして、これはおいしいなど。東京で今までは築地や何やらで買ってたんですけど、さっき元木さんもおっしゃってたんですけど、誰が作ったかっていうトレーサビリティというのが結構大事かなと思ってきて。だから、福島を助けるというよりは、食材に魅了されて使ってるというほうが強いかなと僕は思うんですけど。

○葛西氏（コーディネーター）

そうやって発掘してとかおいしいものを見つけてこられて、実際にお料理に、フレンチに取り入れられてますけれども、お客さんの反応、「これ、福島産なの？」って言う方っていないんじゃないですか。

○無藤氏（ビストロダブル）

僕はあえてこの食材がおいしいというのを伝えたいので、あえて福島産とか地域の名前とか、誰々さんという名前を付けるようにしてるんです。それを3年ぐらいまえからずっとやってるんですけど、お客さんで「福島だからいいわ」っていうお客様はいらっしゃらないですね。むしろ「こんなおいしいんだ」という感動のほうが大きいと思ってますけど。

○葛西氏（コーディネーター）

生産者の元木さんがいろいろ努力されてるという話をおっしゃってましたけど、そういった御努力ですとか、福島をはじめとするそういう製品の皆さんって、検査体制すごく厳しくやっていらっしゃると思うんですけど、その辺りってどういうふう感じていらっしゃる

いますか。

○無藤氏（ビストロダブル）

それは、僕は必ず生産者さんの場所に行ってお話をさせてもらって、それで食べておいしいなと思うところで取り引きをさせていただいているので、もちろんさっきの検査体制ですとか、そういう水産、農産物、全部そういう話もお客様とお話ししながら「だからこうなんですよ」とちゃんとお話しするようにしていますので、それをちゃんと説明してくれると、お客さんも「だからこんな感じでおいしいんだね」とか「安全なんだね」というのが分かっていただけなので、うちのお店のお客様でそういうふうなネガティブな発言をする方はいらっしゃらないと思います。

○葛西氏（コーディネーター）

分かりました。ありがとうございます。

今、生産者の方、そしてそれを受け取って世の中にお皿の上に乗せて出すという事業者の方、お話聞いたんですが、今度は消費者の方にお話を伺いたいんですが、武士俣さん、こういう生産段階での取り組み、それから被災地産品の現状、消費者の反応、作っている方の、お店の方の、たくさん出ましたけれども、率直に伺って、まずどんな感想を持たれますか。

○武士俣氏（日本消費生活アドバイザー・コンサルタント・相談員協会食生活委員会委員）  
現在、被災地で生産され流通する農林水産物は、生産者や事業者の御努力により、放射性物質の基準値を超えるものはほとんど見られなくなりました。また、行政はモニタリング検査をして生産物の安全性を確認しています。皆さんの御努力で現在流通している物質は、基準値を超過しているものはないということが分かって、食品の安全性は十分に確保されているということがよく分かりました。また、いわき市でトマト栽培をする元木さんや、フレンチレストランの無藤シェフのお話を伺い、被災地の食材は安全、安心なことはもちろん、品質に優れ、味も抜群であることを知りました。ワンダーファームの新鮮もぎたてトマトや、無藤シェフの作る魚介類を使った料理をぜひ食べたいと思います。生産者、事業者、行政、それぞれの取り組みが食品の安全確保につながって、私たちは安全な食品を安心しておいしく食べることができます。御努力を続けている皆様に感謝しております。

○葛西氏（コーディネーター）

ありがとうございます。

すごくいい言葉をたくさんいただいたんですけれども、今度は櫻田先生、生産現場での低減対策ですとか、無藤さんからはちゃんと現地に足を運んでお話を聞いて出しているのと、皆さんは逆に福島だからじゃなくてこんなにおいしいものを、と言ってくださると言ってくださったんですが、櫻田先生、この低減対策、それから検査、管理が厳しく行われているというお話。もうちょっと詳しく御説明いただけますか。

○櫻田氏（産業医科大学）

ありがとうございます。今武士侯さんのほうからもまとめていただいたようなお話いただいたところですが、実際の管理というのは非常に幅広く実施している、私のほうからお話ししたところ、また農水省さんからお話しいただいたような形で実施されているんですが、なかなかこういった情報というのは、普段積極的に何かを探して見に行かないと、皆さんのところには届かないところだと思うんです。

実は、こういった検査、評価というのは今回の放射性物質についてだけされているのかといったら、私たち日常生活、皆さんほとんどの方気にしていませんけれども、こういったモニタリングというのは非常に広いところで実施されているのが現状ですよ。食べ物であれば、農林産物他、残留農薬の調査であったり、あるいはさっきお話ししました飲料水、水道をひねったら私たち飲めますよということですけど、これは水質基準というふうな形で非常に幅広いものが検査されていると。そういったところで私たちの日常生活は安全が担保されているんですよというところですが、なかなか普段見るところがないのが現状かなと思います。そういった意味では放射線の基準というのは、一生涯にわたってこれを食べていっても問題ないというレベルに対して、実はその0.1%以下ぐらいが今守られているという状況というところを十分に御理解いただいたらいいかな。特に流通している食品に関しては本当に心配ないというのが、今日いろいろお話あった中でも皆さんも実感できたのかなと思うところです。

#### ○葛西氏（コーディネーター）

ありがとうございます。元木さん、無藤さんのお話から、被災地では本当に十分対策されているということですし、今樫田先生にもおっしゃっていただきましたけど、流通しているものからは基準値を超えるものは出ていないということですし、また基準値もすごく厳しくして、測るなどいろいろやっているということなので、そういったことで冒頭消費者庁からありましたけれども、食品の産地を気にする理由として放射性物質が含まれていない食品を買いたいと、こうやって答えている人は年々減少はしてきているんですよ。

ところが令和2年度の調査、中身を詳しく調べますと、これは2021年1月にインターネットで調査して、5,176人の有効回答があったものなんですが、14.1%、1割強の方が今も放射性物質が含まれていない物質を買いたいから産地を選んでいきますと答えています。この1割強の方、まだ気にしているというデータが出ているんですけども、この辺り、登壇者の皆さんどう感じられるか、まず作っていらっしゃる元木さんから聞いても。

どうですか、1割強の方がまだ産地を気にして選んでいると答えているんですが、どうお感じになりますか。

#### ○元木氏（株式会社ワンダーファーム）

そもそも日本の放射性物質の基準というのは、国際的に見ても非常に厳しい基準になっておりまして、例えば、国際的な食品の基準を決めるコーデックス委員会の基準ですと1kgあたり1000Bqが基準値であったり、ヨーロッパに関しては1250Bq/kgであったり。それに対して日本は、我々の農産物であれば1kgあたり100Bqと、10倍近い厳しい基準になっているんですね。その14.数パーセントの方々に対して、ちゃんと正しい情報をまだまだ私たちは届けられていないんだらうなという思いがある一方で、逆に返すと80数パーセン

ト、大半の方々は福島だからというのは気にしていないという結果だと思いますので、私たちは福島県産を避けるという 10%強の方々に目を向けるというよりも、むしろそれ以外の方々に向けて本当においしいもの、本当に鮮度のいいもの、トマトでいえば甘いもの、こういったものをいかに届けられるかということに、今は意識を変えてやっています。もちろん当時はネガティブな反応をされる方のことばかり見ていた時期もあったんですけども、今はそうではなくて、大半の方にいかにいいものを届けるかという意識で、今は生産をさせていただいています。

○葛西氏（コーディネーター）

風評というものをどうやったら払拭できると思いますか。

○元木氏（株式会社ワンダーファーム）

なかなかいろいろ私たちもこれまで、今もそうですけど、数値を出したりやってはいますけれども、恐らくこれは限界があるのかなと思っていて、むしろもっと食の楽しい面であったり、こういう栽培をしているからうちのトマトはおいしいんだという部分であったり、また、福島に来ると今こんな新しい取り組みが行われていて、他ではできていないことが今できているんだよとか、もちろんネガティブな部分もあるんですけども、むしろポジティブな部分のほうが多いので、そういった情報をどんどん私も友人、知人はじめ、インターネットや SNS などで発信をして、福島に興味を持って来ていただく。来ていただいて、現地で畑を見ていただく。作っている私のことも見ていただく。地道ではあるんですけども、そういうような活動を今一生懸命力を入れてやっています。

○葛西氏（コーディネーター）

ありがとうございます。また後ほど伺います。

では、今度は事業者の無藤さんに聞きますけれども、どうですか、やっぱり 1 割強の方がまだ産地を気にして選んでいる、その辺りどうお考えになりますか。

○無藤氏（ビストロダルブル）

私どものお店にそういうふうな反応をされるお客様いらっしゃらないんですけど、確かに元木さんがおっしゃったみたいに、その 1 割何とかするっていうよりかは、もっとコアなファンをつくっていくというほうがいいかなと思っていて、お料理もトマトだったらトマトでもっとおいしい食べ方があるよとか、こういう料理できるよ、ってやって、食べておいしいなと思って、「なんだ、福島だ」っていうところに持っていったほうがいいんじゃないかなと僕は思って、話をしながらお客様とお料理を出していくんですけど。

○葛西氏（コーディネーター）

元木さんも無藤さんも、それこそ前を向いて、10%のほうじゃなく 90%の人が支持している方向に乗って、次のステップに行ったほうがいいよという考えですね。

○無藤氏（ビストロダルブル）

そうですね。だからその中で、例えば日本全国おいしいトマトいっぱいあるんですけども、その中でも福島のトマトを食べて「やっぱりね」と言われるようなトマトを作るのが僕の仕事で、それをどういうふうにして努力して農家さんが作っているのかということもお伝えするのが、僕の仕事かなと思っているので、トマト界の上のほうに福島来てるよ、って言う話をできるようになればいいんじゃないかと僕は思っています。

○葛西氏（コーディネーター）

なるほど、力強い御言葉ですね。お二人の話を聞いて武士侯さん、この調査についてまず率直にどう思うかということと、風評を払拭するにはどうしたらいいかという辺り、お聞かせ願えますか。

○武士侯氏（日本消費生活アドバイザー・コンサルタント・相談員協会食生活委員会委員）  
私は NACS という団体に所属しているんですけども、去年の 10 月に全国の会員 124 名を対象に web 調査を実施しました。アンケートに回答した会員のほぼ全員が被災地の食品を積極的に購入し、エシカル消費など様々な啓発活動の場で消費者に安全性をアピールしていると答えています。また 124 名のうち 30 名は、企業や行政で相談業務に携わる相談員で、そのうちの 7 割が被災地食品に関する消費者相談は少なくなったと回答しています。相談件数は震災以降年々減少してきており、食品中の放射性物質に関する不安は払拭されつつあるようです。

しかし一方、消費者相談の現場において問い合わせ件数が増えた、または震災当時と変わらないと答えた会員が 3 割いました。NACS の調査でも一定数の消費者は不安をもち続けていることが分かりました。また、積極的に情報を得て正しい情報を見極められるはずの NACS 会員でも、少数ながら不安を持つ会員がいます。一部を御紹介しますと、「原発事故は衝撃的な出来事で、原子力発電所がある限り不安を持つ人はなくなる」「子育て中なので、漠然と不安」などの声です。ここで相談件数が少なくなった原因ですが、まず生産者、事業者、行政、それぞれの取り組みが食品の安全確保につながって、消費者の信頼を得たこと、様々な啓発活動で理解が進んだことが挙げられます。もう一つには意識や関心が風化してきたことがあります。124 名のうち 7 割が消費者の関心や意識は薄れてきていると答えています。会員からは、「新聞、テレビの報道が減ると、関心が薄れる」「過去の出来事になりつつある」などの声が聞かれました。また「より身近なコロナウィルスへの関心が高い」「コロナ禍で賃金に不安があり、食品の安全性に気を配る余裕がない」と、コロナ禍を理由に挙げる会員もいました。

私が心配するのは、不安をあおる報道や、SNS などで発信される不正確な情報やフェイクニュースの出現です。今は関心を持たず気に留めていない消費者も、ひとたび風評が拡散すると、玉石混交の情報に振り回され、正しい情報を見る目を失ってしまうのではないかと危惧しています。風評の払拭には消費者として正しい情報をきちんと理解していかなければならないと、私自身も肝に銘じています。

○葛西氏（コーディネーター）

ありがとうございました。お三方にお話を伺いましたけれども、震災からまもなく 11 年



ですが、それでもまだ1割の方は放射性物質が含まれている食品なんじゃないか、それ不安じゃないかというのでなかなか選べないという実態があって、ですが生産者の方、それからシェフは、そうじゃなくてもっと魅力的なものをPRすることによって前を向いて進んでいこうではないかという話がありました。逆にNACS、消費生活アドバイザーの皆さんのデータを持っていらっしゃる武士俣さんは、爆風で飛んだ映像が衝撃的で、なかなかそれから刷り込まれたところから皆さん更新されなくて、新しい情報が入っていかないんじゃないかという話も出ました。コロナでフェイクニュースがあったから、そのほうも不安だという話が出たんですが、私は風評被害のこの根底というのは、放射性物質というのがよく分からないものだし、何となく避ける、忌避意識とか恐怖心があるんじゃないかというふうに思います。

また、先ほどこのパネルディスカッションの前に、経済産業省の方からALPS処理水に関する情報提供がありましたけれども、これもまた新たな風評が出てしまうのではないかとちょっと不安になっているんですが、樺田先生、その辺り食品中の放射性物質のリスク、それから風評、どんなふうに考えればいいのかというのをお話しいただけますでしょうか。

#### ○樺田氏（産業医科大学）

リスクというのを皆さんどの程度に捉えるのかというのは、これはなかなかやっぱり難しいところだと思うんです。さっき私が講演した中でも最後にお話した、リスク認知というのは個人個人非常に幅が広いんですよと、ここはやっぱり皆さん前提として考えておかないといけないと思うんですよね。実際の科学的なリスクの大きさがどうなのかということに関していえば、放射線であっても他のものであっても、影響というのは暴露される量次第なんですけど、その量に関して言えば、今放射線に関してはずっとお示ししてきたような環境で、非常に少ない量になっているということで、心配ないというのが科学的な事実なんだと思います。

食品のモニタリングとかということに関しても、事故初期のときには確かに非常に高い濃度のものがあるということで、そういうものが実際食べられないように規制していきましようという目的がありました。今は、さっきもちょっとお話した水道水であったり、残留農薬であったり、こういった日頃管理されている、モニタリングされているんですけども、そういったものと同様、普通に管理する環境になっていて、それがちゃんと運用できているのかということの評価するような位置付けとして、そのものがモニタリングされていて、やはりちゃんとカバーされているという実態が改めてこうやって見れたというのが現状だと思うんですね。

そういう意味では、非常にリスクが小さいということについては、科学的な技術としては提示できるというところですけど、それをどう捉えるか。どう捉えるのかというときには、やっぱり不安ということが今も出てきたけれども、さっきのトリチウムの問題もそうですし、10年前も放射線、放射性物質というのは、まさに11年前はそれが不安のターゲットになるところでした。今やコロナがずっとこの2年間まさにそういう不安に思うターゲットになるんですけども、これはこのリスクコミュニケーションとかいうのを科学として議論し始めたときからずっと言われていることですけども、初めてのものに対する不安というのはものすごく大きいものとして私たち感じるというところなんですね。

それとともに、自分が積極的に選んだリスクよりも人から押し付けられるようなリスクというのに対しても、すごく大きく感じる。車運転することというのは、リスクが本当はすごく高いもので、今交通事故の死亡者数というのは随分減っているところですけども、一世代前であれば、一生を通して車を運転していると300人に1人は交通事故で亡くなっているというのが、普通の状態のリスクの大きさですけども、今日比べているリスクなんかと比べると桁違いに大きいんですけども、それは自分が選んで利便性があるから、みんな受け入れているわけですよ。そういった意味で、自分が選んだリスクに関しては小さく見るけれども、押し付けられたリスクに関しては非常に大きく捉えると。

また、次世代とか子どもさんとか、非常に広いところに影響を及ぼすものについても、リスクって大きく捉えるというふうなところがある。そういったことを考えながら見ていかないといけないかなと。まさに今コロナでワクチン接種しましょうというところでも、不安がられているというのはまさにそういったところ、同じ環境になってるかなというところですね。

そういった意味で見ていったら、さっき元木さんのほうからも言われてましたけれども、不安に思われる方が今14%ぐらい、逆にいえば85%ぐらいの方が不安じゃないと思ってる、これはごくごく当たり前の環境が今もうつくられつつあるんじゃないかと、私も思うところです。不安に思う人をゼロにしていきましようというのは特に必要ない。どうしてもやっぱり認知が違うんだから不安に思う人は当然いるわけですので、不安をゼロにするっていう必要は特にないのかなと思うところです。

ただ、不安が非常に強くて、ある程度私たち不安を持ってないと無防備なことをやっちゃって、余計大きなリスクにつながりかねないわけですから、次の予防措置として不安ということは、私たちを守るためにも必要なんですけども、そのリスクが大きくなり過ぎると、眠れないとか身体症状が出てくるとなると、それは対処しないといけないということになると思うので、今は放射線のほうに関しては少なくともそういう世代じゃなくなってきてるんですよ、というのが最近の数値が示すところかなと私は思います。

#### ○葛西氏（コーディネーター）

ありがとうございます。初めてのもの、分からないものというのはより不安が大きいし、自分が選んだリスクよりも、人に押し付けられたリスクのほうがよりリスクを感じる、なるほどという感じがいたします。私たちもそういう点では実際に訪問して、無藤さんのようにいいものを見極めに見に行くとか、手元に資料を取って読んでみるとか、情報を科学的根拠に基づいて正しく判断できるような目というか気持ち、そういうものを持つのが大切なのかなと思います。

さて、ここまでは登壇者の皆さんとともに過去、現状を考えてきましたけれども、これからは皆さんと一緒にこの先、未来について考えていきたいと思えます。

まず元木さん、生産者としてこれから将来を見据えて、どんなふうに取り組んでいくとか、何かやってみたいことというものがあったら、お聞かせいただければと思うんですが。

#### ○元木氏（株式会社ワンダーファーム）

先ほど海洋放出の話がありましたけども、昨年そのニュースが発表されたときは、やっぱり地元でも結構衝撃が大きかったです。ただ、どういう状況か分からないから皆さん結構動揺したんですけれども、今私の肌感覚でいえば6～7割の地元の方々はALPSという除去装置で処理した処理水が海に流されるということは、大半の方は理解してきています。

ただ、一定数の方々はまだまだやっぱり汚染水が流されるんじゃないかとか、もっともってタンクを増やしてためておけばいいんじゃないかなんていうふうに思ってる方も、やっぱり一定数いらっしゃるんです。そういった方々に対しては引き続き丁寧な説明が必要なのかなと思う一方で、福島ってもともと食材の王国と呼ばれていて、本当に内陸の会津に行くとスキーやスノーボード、温泉が楽しめて、一方で私どものいわき市の浜通りに来ると、今日も本当に晴天なんですけども、サーフィンをやっている人がいたり、すごくきれいな海が広がっていたり、すごい風光明媚な県なんです。特に食べ物がおいしい。農産物だけでなく魚もおいしい。やっぱり食材がいいと料理する料理人たちの腕もいい。福島に来ていただくと本当に皆さんおっしゃるのは、やっぱり人と食べ物だと。東京から2時間ちょっとでこんなにうまいものが食べられるんだ、大半の人が来ていただけると言っていたんです。

無藤シェフもしょっちゅう来てくださるんですけれども、無藤シェフのように実際現地に来ていただきたい、そういう活動をこれからももっともっとやっていきたいというふうに思っていて、そこで得られるものは何かというと、やっぱり金銭的な価値とかではなくて、幸せだったり、人とのつながりであったり、おいしいものを食べたときに笑顔とか幸せだったり、そういうものが得られるのがまさに福島県だと思いますので、そこを多くの方々にもっともっと発信をして来ていただく。温泉もあり、日本のハワイと呼ばれている地域ですので、スパリゾートハワイアンズもあり、おいしいトマトもあり、来れば幸せになりますので、ぜひそういう発信の活動を今後もやっていきたいと思っています。

#### ○葛西氏（コーディネーター）

現地に行かなければ分からない、プライスレスな幸せというところですね。先ほど打ち合わせのときにもおっしゃってましたけど、もう10年以上たっているから、「被災地」とか「復興支援してください」と待ってるだけじゃなくて、仕掛けていこうかなんていう話もされてましたよね。

#### ○元木氏（株式会社ワンダーファーム）

そうですね。11年たってもあの当時のことは昨日のことに覚えていますけども、やっぱりもう被災地とか風評とか自分たちからは言わずに、本当に福島の魅力をどうやって伝えていけるかという、これが結果として風評の払しょくにもつながっていくでしょうし、福島のファンの増加にもつながっていくだろうなと思っています。

#### ○葛西氏（コーディネーター）

分かりました。私もすぐ後ろのトマトの映像が美しいので、行きたいなという気持ちでわくわくするんですが、お名前が出た無藤さん、無藤さんはウェルカム、また来てねっておっしゃってましたけれども、将来を見据えてこれからやっていきたいこと、何か展開する

ことって教えていただけますか。

○無藤氏（ビストロダルブル）

元木さんのワンダーファーム、最近レストランがリニューアルして、またちょっとメニュー、なかなかおいしくて。僕もこの前食べたんですけど、また行きたいなというのは先にちょっと言わせていただいて。

今後やりたいのは、やっぱり地域のまだ知られていないものという食材も結構あるんですよ。先ほど櫻田先生おっしゃった、よく分からないものって食べないよねって、手を付けづらいよねっていうのがあったじゃないですか。地元の人には食べてるんですけど、東京に来ると何ですかみたいなお客さんも結構いるんですよ。

○葛西氏（コーディネーター）

例えば。

○無藤氏（ビストロダルブル）

例えば、ホヤっていうのが宮城県とかだとすごく生産が、名物なんですけど。

○葛西氏（コーディネーター）

私も東北の人なので生食でも食べますし、干した感じにして。

○無藤氏（ビストロダルブル）

ありますね。ところがちょっとやっぱり、これは僕らの責任でもあるんですけど、東京のほうとかに行くと、正しいホヤの処理の仕方というのをよくご存じない料理人の方も結構いらっしゃるんですよ。それが結果おいしくないねっていう風評被害を出しているところもあるので、ちょっとホヤとかそういうものをどんだんうちのほうで、いろんな食べ方あるんだよという、その分母を増やしていこうかというのをやりたいと。

○葛西氏（コーディネーター）

でも、ホヤとフランス料理って、ちょっと思いつかないんですけど、使ってらっしゃるんですか。

○無藤氏（ビストロダルブル）

うちは前回の食材探しツアーのときにホヤを手に入れまして、そのときにちょっとやっぱり、今まで韓国とかによく輸出してたんですけど、その韓国のほうで取り引き止めたいなみたいな話があって。

○葛西氏（コーディネーター）

それはコロナか何かの関係ですか。

○無藤氏（ビストロダルブル）

例の震災の風評被害です。じゃあどうするかってなって、国内の消費増やそうよってなったんですけど、今までホヤの食べ方というと、酢の物にしたり、刺身にしたり、てんぷらにしたりとかそれぐらいしかなかったんで、じゃあちょっといろんな食べ方やれば、料理が増えれば分母も増えるだろうというので、好奇心から始めたんですけどね。

○葛西氏（コーディネーター）

素晴らしいですね。おいしいものを作って待ってる元木さんと、そのおいしいものにさらに磨きをかける無藤さん。わくわくしますね。

○無藤氏（ビストロダルブル）

だから、ちょっとこういうことをいろんなジャンルの、農家さんからこんなのあるよとか、漁師さんからこんなのあるよって言われたことを提案されれば、いろんな料理を作ってお店を出して。それでお客さん、さっきのよく分からないものは食べないと思ってたんですけど、意外と食べて反応もいいので、やり方次第、PRの仕方次第かなと思ったりもしますが。

○葛西氏（コーディネーター）

逆にいまだに1割の方選んでますけれども、そういう1割の方、選んでる方にどうやってら知ってもらえる？

○無藤氏（ビストロダルブル）

多分風評被害っていうのはイメージかなと僕は思うんですが、要は報道なんかでもよく使われる汚染水。汚染水だと駄目じゃないですか。でも僕、さっきの樫田先生の後援を聞いてて、処理水とか、中に含まれているのはトリチウムで、それは水素のアイソトープだよというのがちゃんと皆さんが分かれば、「なるほど」と分かっていただけだと思うんで、こういうものだよって、やっぱり丁寧な説明というんですかね。あとネーミング、これを変えることによってだいぶその辺のパーセンテージも下がってくるんじゃないかと思いますが。

○葛西氏（コーディネーター）

広報の出し方の工夫というのも、やっぱり考えないといけないというところなんだろうかと思います。ありがとうございます。

お待たせしました、武士侯さん。皆さんのお話いろいろ聞いて待ってらっしゃったと思うんですけども、武士侯さん、私も消費者として皆さんの話、結構刺さるなと思いつつ聞いてたんですが、武士侯さんはこういう一連の考え、どういうふうにお考えですか。

○武士侯氏（日本消費生活アドバイザー・コンサルタント・相談員協会食生活委員会委員）  
皆さんの努力は本当に素晴らしいし、私もおいしいトマトやホヤを使った料理、食べたいと非常に思うんですけども、なかなか消費者を説得するのは、あと1割の方としても、難しいことだと思います。

櫻田先生もおっしゃっていたんですけど、初めて知る言葉や問題は不安が付きまといま  
す。ALPS 処理水の海洋放出は、NACS 会員にも関心の高いことの一つで、今回 web 調査  
を NACS 会員に行ったんですけども、自由記載では最も多い 112 件の具体的な声が寄せ  
られました。「トリチウムを含む処理水の海洋放出に不安を感じていますか」の問いに対し  
ては、約半数の会員が不安を感じていると答え、不安はないと答えた会員は 3 割でした。  
気になる点は「分からない」と答えた会員が 2 割いたことです。具体的な声ですけども、  
「リスクアセスメントを十分に検討した結果で、信頼に値する」という声がある一方、「ト  
リチウムという物質をよく知らない」「しっかり理解できないため、判断がつかない」「一  
般消費者には難しい」などの声がありました。

また、「リスクは多いか少ないかではなく、あるかないかが問題」「濃度が低いとはいえ  
不安」など漠然とした不安を訴える会員もいました。このことから、まだ十分な情報が消  
費者に届いていない、また届いていても簡単には理解できず、不安を感じていることが分  
かりました。さらに行政と消費者の信頼関係を憂れうる会員もいました。「政府の言う安全  
をそのままのみにはできない」「当初は安全性に問題がないと言っている、後で問題が  
発生したことがあった」などの回答です。また、「処理水の海洋放出で、消費者の関心がリ  
セットされる」など、原発当初のような消費者心理の再燃を懸念する声、「魚介類への影響  
がゼロとは言い切れない」「魚全部を食べない傾向が強まるのではないか」など、今後の食  
生活の行方を心配する声もありました。水産物は栄養の宝庫で、魚離れは健全な食生活へ  
の悪影響となります。海、山、里の多様な農林水産物と、その持ち味を生かした和食は、  
ユネスコの無形文化遺産にも登録されています。親から子へと受け継いできた日本の食文  
化を守るためにも、私たちの健康を守るためにも、魚離れは私の最も懸念することの一つ  
です。

情報発信をしても興味のない人は見たり聞いたりしてくれません。興味や関心があつて  
も、フェイクニュースを信じてしまうこともあります。何か隠し事をしているのではない  
か、深刻な事態に陥っているのではないかと疑心暗鬼にかられると、新たな風評を招き  
かねません。消費者との信頼関係が損なわれることのないよう、これからも情報は包み隠  
さず公開し、分かりやすく発信していただきたいと思ひます。

感情的な安心感と科学的な安全性との間には乖離があり、それを埋めていくことが消費  
者団体としての務めです。NACS としても生産者、事業者、行政から発信される情報をよ  
く理解し、消費者視点を持って消費者相談に対応していきたいと思ひます。また、様々  
な啓発活動においても、科学的根拠に基づく安全、安心を分かりやすく伝えていきたい  
と思ひます。元木さんや無藤シェフのように、安全安心でおいしい食べ物を作ってい  
らっしゃる方々が勢いづいています。御尽力をされている方の努力を NACS の活動  
の中で多くの消費者に伝えるとともに、私も一人の消費者として、風評に惑わされず  
正しい情報を得て、食べ物に感謝して食生活を営んでいきたいと思ひます。

○葛西氏（コーディネーター）

ありがとうございます。何だかほぼほぼまともに入ってしまったようなんですが、最後  
になりましたが、櫻田先生、まよめのまよめをお願いしたいと思ひますが、よろしくお  
願ひいたします。

○櫻田氏（産業医科大学）

今、NACSの武士侯さん、本当にきれいにまとめていただいて、リスクコミュニケーションの難しさがどこにあるのかということ、まさに今お示しいただいたところだと思うんですね。そういう意味で、今日こういう場が設けられているところなんだと思うんですけども、今幾つも課題になるところを挙げていただいた中でも、科学的な安全と安心感が乖離してるといえるのは、まさにそこがやはり皆さん方が腑に落ちないところというような問題だと思います。またリスクに関しては、大小じゃなくてあるかないかが問題と捉えている人もいたというようなお話もいただいたところです。ここは、日本人特にこの辺りが、今まであまり接触する機会がなくて弱かったところだと思うんですね。ゼロか1か、安全か悪いものかどっちかでしかないというふうな捉え方をされていたところですけども、リスクというのはそもそもが確率としてどの程度のものなのか、それを私たちがどう受け止められるのかということ、これを学んでいきたいと思いますというところで、ここはなかなか今までリスク科学とかというのもなかった、ようやく原子力発電所の事故を契機にして、日本でもそういう議論がされるようになってきた。また、コロナの中でもワクチン接種を含めて同じように考えるようになって、私たちがどこまで腹をくくってそれに受け入れられるのかというような課題を突き付けられているところなんだと思うんですね。

そういった中で、実際食べるもの、事故による放射性物質に関しては、さっきも出てきたように管理されているものに関しては十分に安全であるということ、これは確保されているところですけども、その情報をいかに伝えるかということ、まさに今日こうやって開かれているようなコミュニケーションの場があるというふうに理解しながら、この後の質疑のところ、皆さんとお話できればいいのかなと思っているところです。よろしくお祈りします。

○葛西氏（コーディネーター）

ありがとうございました。本当にたくさん御意見いただきましたけれども、よく分からない、今トリチウムまた出ましたが、一般消費者にはちょっと難しいようなことはよく分からない、押し付けられているとちょっと拒絶になるので、その辺り広報を出す側も分かりやすく、無藤さんから汚染水と言われると厳しいので、処理水という言葉に統一してくださいというのもありましたが、やっぱりそういうイメージ戦略の他により科学的な中身を分かるように、広報のほうも出していかなきゃいけないんじゃないのかなと思います。

そして私たち消費者、受け手側も、訳分からないからってオミットしないで、もうちょっと次のステップで、これって何だろうって、今スマホとかありますし、ちょっと調べてみる。一歩前に進んでみるということも大切なのかなと思います。

では、この後は皆様から御意見をいただいているということですので、会場整備のための15分間の休憩を挟んで、再開を16時5分、4時5分に再開させていただきます。なお、ただ今の意見交換についてですが、この後私たちどんな質問が出てくるかを見せていただきますので、皆様からの質問はここまでということにさせていただきます。御質問お寄せいただいた皆様、どうもありがとうございました。

それではお休みをいただいて、再開は午後4時5分とさせていただきます。

(休憩)

○葛西氏（コーディネーター）

それでは再開いたします。

たくさんの皆様からいただきました、御意見、御質問にここからは答えていきたいと思えます。ここからは前半でお話しいただきました、行政の担当の皆様方にも御登壇いただいております。

では、皆様から寄せられた質問、たくさんあるんですけども、最初は「福島県産の農産物について。価格について私は思うのですが、他の都道府県のものに比べると福島県産はやや価格差があるのではないかというふうに思います。感触で構いませんので、生産者の方、それから事業者の方、教えていただければ幸いです」というのが来ていますが、元木さん、福島県産の農産物、他の都道府県のものよりは価格差やや落ちるんじゃないかというイメージなんですけど、と。その辺り素直な印象で結構ですのでお話しいただければと思いますという質問が来ていますが、どうでしょうか。

○元木氏（株式会社ワンダーファーム）

これは難しい質問かなと思うんですけども、確かにそう思うこともあります。ただやっぱり、農産物というのは市場出荷をしていく上ではどうしても需要と供給のバランスの中で価格が決められていく部分が、他の野菜も含めてなんですけれども、あります。需要に対して供給が少ないときは、私たち福島のトマトも当然他の産地と同じように価格は上がるんですけども、需要に対して供給が多くなるときは、どうしてもやっぱり値段というのは安くなっていきます。これは他の野菜も、他の産地のものも全てそうだと思います。そういうときに、やっぱりどうしても他の産地のものもいっぱい選択肢がある中で、福島県産はちょっと後回し、優先度合いとして低くなる可能性はあるかなとは思っています。ただ一方で、私たちもそうなんですけど、直接取引においては、私たち福島のトマトをちゃんと適正な価格で私たちが再生産可能な適正な価格で買ってくださいの方も、事業者の方や個人の方も多くいらっしゃることは事実ですので、であれば、私はそこは風評とは捉えずに、より品質のいいもの、安定した量、味、こういったものを追求して、より高く買ってもらえるような形をつくっていくということが重要なかなと思っています。

○葛西氏（コーディネーター）

ありがとうございます。続いてこれは仕入れのときの感覚を無藤さんということなんですけど、無藤さん、福島のものとは都道府県で比べると他府県よりも価格差があるのではないかと、感触でどうぞということなんですけど。

○無藤氏（ビストロダルブル）

一般消費の目線ではなくて買う立場からすると、市場価格というよりかは品質にお金を僕は払うんですね。いわゆる価値があるものは高くても当然なわけで、福島の農家さんとか、



あと東北でいろいろ被害に遭った方々、いろいろ頑張っているんですけど、頑張っているだけじゃなくて、ちゃんとそれに味が乗っているものに関しては、僕はその値段でいいかなと思って、その値段で買います。買った上で、それに料理をしてさらに価値のあるものに変えて、お客さんが納得する値段で売ると。こういう流れを一番重要視しているの、御質問の答えになるか分からないんですけども、僕はものの価値において仕入れをしている。その値段は農家さんが決めていただいたところで、僕はそれをダンピングすることなく、ものに対して買う感じですので、ちょっと低いんじゃないかと思うこともありません。

○葛西氏（コーディネーター）

分かりました、ありがとうございます。お二人に伺いました。たくさんございますので、どんどん伺います。

今度は基準値についてということなんですが、「放射性物質へのリスクの対応の見直しなど考えてはいるのでしょうか。また 17 都道府県で行われているモニタリング検査の方法などについても教えてほしい」ということで、これは厚生労働省さん、お願いできますでしょうか。

○飯塚（厚生労働省）

厚生労働省の飯塚でございます。御質問ありがとうございます。

まず1つ目の御質問に対する回答なんですけれども、食品中の放射性物質の基準値については、先ほども御説明しましたとおり、コーデックス委員会が指標としている、食品から追加的に受ける線量の上限である、年間線量 1 mSv を踏まえるとともに、食品安全委員会等の関係府省や多くの専門家と丁寧に議論を重ね、長期的に食品を摂取しても健康影響がないよう、科学的な知見から安全性確保できる値として設定しております。一般論にはなるんですけども、食品の安全性確保にかかる取り組みにおいては、科学的知見に基づき必要な検証、今見直しを行っているところでございまして、なかなか将来について予断を持ってお答えすることが難しいというふうに考えております。こちらが1つ目の回答になります。

○葛西氏（コーディネーター）

それから、17 都道府県で行われているモニタリング検査の方法について教えていただきたいということなんですが、この辺りはどうでしょうか。

○飯塚（厚生労働省）

続きまして2つ目の御質問の件なんですけれども、こちら繰り返しにはなってしまうんですけども、モニタリング検査というものは原子力災害対策本部が定めたガイドラインに基づき、各都道府県で検査計画を策定し、実施されております。検査対象と指定されていない他の品目についても、必要に応じて検査を実施することがガイドラインに示されていますので、詳細についてはこちらのガイドラインを御確認いただけたらというふうに考えております。以上となります。

○葛西氏（コーディネーター）

ということでございます。まだいっぱいあるので伺います。

続いては、コミュニケーションの取り方についてだそうです。

「放射線や放射性物質を放射能とひとくくりにして怖がっている人が多いのではないかという印象を、常々持っております。いくら安全ということを説明しても、放射能と認識したらシャットアウトされてしまいがちです。先生方、どのようなコミュニケーションを取っておられるのでしょうか」。樺田先生と書いてありますので、樺田先生。樺田先生、もう1枚来てますので。「樺田先生にトリチウム水の放出の安全性について、科学的な性質の解説なども加え、もう少し説明をお願いします」というふうに樺田先生ご指名でございます。よろしくをお願いします。

それから、樺田先生の他にコミュニケーション、ジャーナリストの方にもお願いしますというので、私もその後答えます。まずよろしくお願ひいたします。

○樺田氏（産業医科大学）

まずコミュニケーションのほうですけれども、コミュニケーションの根幹になるところというのは、さっきの講演の中で私が最後にお話ししたようなところ、やっぱりあそこを一番意識しておく必要があるのかということ、受け取り側と話し手側がもともと基盤となる認識が全然違って来る、リスクの認知の幅とかが違って来る可能性があるということ、十分承知した上で、やっていかないといけないのかなど。よく災害があった後に、多くの人に集まっていたいて情報提供し、コミュニケーションの場ですよというような形がつくれますけれども、クライシスコミュニケーションと違っていうと、災害が起こってすぐのときには、そういう一方的にまず情報発信しながらお互い理解する場をつくりましょうというふうなところも設けられますけれども、それは下手するとやっぱり説得の場になるわけです。情報を提供して、あなた理解してね、ここで我慢してねみたいな形になって、説得の場になるところが大きな問題になると思いますので、コミュニケーションを行っていくという上においては、やはり両方双方向でやっていくということで、傾聴というふうな形、耳を傾けて聞くという傾聴というようなことがよく言われているところですが、そういったところを常に気にしながらやっているところではございます。一方的に情報発信する分と、やはり傾聴していくというところで違って来るということなので、集団に対してやるときと、不安に思っているご本人と対応しながらコミュニケーションを取るときには、かなりやり方も変わってくるのかなど。具体的に、私も事故後幾つかのところ実践する機会もありましたけれども、そういうときには御質問いただいている方が、本来回答する人をとっちめようと思って質問しているわけじゃなくて、やはり自分が不安に思って、自分の中で整理できていないところがあると思って質問されているわけですから、そこを一緒に聞きながら解きほぐしていくような場をつくれるような形で、傾聴しながらやっているというふうなところが、私としては気を付けているところでございます。取りあえずこちら、最初のほうの質問の回答で。

○葛西氏（コーディネーター）

それから、トリチウム水の放出の安全性について、もう少し説明をお願いしますということなんですが。

○櫻田氏（産業医科大学）

そっちもやっちゃっていいですか。ジャーナリストの立場で。

○葛西氏（コーディネーター）

私はまとめて最後に受けてやりますので。

○櫻田氏（産業医科大学）

トリチウムのほうに関しましては、さっき経産省のほうからも、私途中で1枚だけスライド説明しましたがけれども、ものとしての正常ということであれば、トリチウムというのは放射線の種類でもβ線というのを出す。そのβ線もものすごくエネルギーが低いものを出すものですから、基本的には外部被ばくというのは全然心配ないものなんですね。やはり内部被ばくというのが気になるものですが、海洋放出してその水ががぶがぶ私たちが飲むというものでもございませぬので、そういった中でのリスクが十分受け入れられる範囲のものとして、放出してやっていくということが実施されるように、今議論されているところです。

ちなみに、内部被ばくの場合もトリチウムの半減期、ものがあれば放射能が半分になるまでの期間が12.3年という長い期間になるんですけども、さっきも経産省から御説明がありましたように、大半は水の形でありますから、私たちの体の中というのは、60%から70%ぐらいが水でできてるんですね。その水というのは日々入れ替わっているものですから、10日もたつとも水というのは入れ替わるわけなんです。そういう意味では、体の中に入っても非常に早い段階で放射線元素としてのトリチウムというのは置き換わっていくよというふうなところで、そういう点でも心配は非常に低いところですよという、そんな感じの下での放出を検討されているというところを理解いただいたらいいと思います。

○葛西氏（コーディネーター）

ありがとうございました。受けてコミュニケーションの取り方どうしてますという、私のほうは、報道するときは曖昧な言葉はまず使わない。どちらでも取れそうな言葉はまず使わない。それから、出所、「何とかによります」とよくニュースで言いますが、出所をちゃんとするというのと、3つ目は皆様が分かりやすい言葉でなるべく説明する。自分が分からないと多分聞いていらっしゃる方も分からないと思いますので、その点では、今トリチウムの話が出ましたけれども、さっきの経済産業省の方がトリチウムというのはβ線、β崩壊を出すときに非常に弱い放射線を出す、ピッチャーズマウンドから弱いピンポン玉を投げているようなものだという、非常に分かりやすいなと思いました。ぜひこの後、私何か説明するとき使わせていただきたいなという感じに思うほど、やっぱり皆さんの目線で分かるということが大切なのではないかと考えております。

では、続いてまいります。

続いては、福島第一原発のALPS処理水の海洋放出について、「海洋放流する方向で進めら

れていますが、まずどのようなお考えでそうなっているのか教えていただければ幸いです」ということで、これも櫻田先生お願いしますと書いてあるんですけども、櫻田先生、ALPS 処理水の海洋放出、何でどのようなお考えでこのようになっているのか教えてください」というふうになっております。同じくこの後 ALPS 処理水は経済産業省さんにもありますので、まず櫻田先生から。

○櫻田氏（産業医科大学）

基本的なところはさっきお話ししたようなところで、非常にエネルギーの低いもので内部被ばくが問題になってくるけれども、そういう機会が抑えられるというところで、放出されると。それも事故のときにはサイトのすぐ目の前で汚染水が漏れていくような状態でしたけれども、海洋の中でも希釈されるように、1キロ以上遠方のところまで誘導して流していくという対応が取られるような環境がつくられているというものだと思います。そういった回答でよろしいでしょうか。

○葛西氏（コーディネーター）

ありがとうございます。また、ALPS 処理水、同じくきてるんですけども、「このように海洋放出が行われると、魚介類に対しては非常に心配になっています。効果的な風評被害対策の検討などは国で行われているのかどうか」。これは経済産業省さん、お願いしますということです。

○谷川（経済産業省）

御質問ありがとうございます。私の説明は科学的な根拠に基づく安全性を中心にさせていただいたと思いますので、ちょっと至らなかったのかと思います。私が用意しました資料で飛ばしたものがございますので、そちらをご覧くださいてもよろしいでしょうか。こちら、いかにも役人的ではございますけれども、政府としまして ALPS 処理水の対策を取りまとめたものでございます。

まずは安全性を確保する、それから風評被害が起こらないようにするためには何をすればいいのか、あの手この手を考えようということでございます。特に左側の青地で囲っているところなんか、風評被害が起こらないようにしようと。①は当然ながら安全性を確保する、②はモニタリングをすると、それは御説明申し上げました。③は、政府以外に、国際機関、IAEA ですとか、地元の漁業者、第三者の方の目線も入れてみようとか、(2)にありますのは、様々な情報発信、漁業者や流通業者をはじめとした幅広い方々に御説明をして、シンポジウムをすとか新聞広告をしていきたいと考えております。本日もこういった機会をいただきましたことについては御礼申し上げたいと考えております。

あと最後に1枚だけ。海外にも情報公開をしております、ALPS の海洋放出の方針を決定した後も、輸入規制を撤廃している国が多くございますので、御紹介させていただきます。ありがとうございました。

○葛西氏（コーディネーター）

ありがとうございました。時間も迫ってきておりますが、あとお一方の質問を御紹介しま

す。これは放射線の正しい知識の普及ということなのですが、「学校教育の中で生活の中にある放射線の正しい知識を学ぶ機会をもっと増やすべきだと思いますが、消費者庁さんいかがですか、文科省さんに働きかけてはいかがでしょうか」というふうに書いております。よろしく願いいたします。

#### ○消費者庁

消費者庁でございます。放射線教育につきましては、文部科学省のほうでもいろいろ実施されているところでございまして、今日御講演いただいた樺田先生からもご紹介があったと思いますけれども、放射線の副読本といったようなものを作られて、全国の学校なんかにも配られていると思うんですけれども、その中でも消費者庁も協力をさせていただいて、特に食品と放射能の関係、その部分については今日他にも出席しております農水省さんや厚労省さん、経産省とかも一緒に協力しながら、副読本のコンテンツの充実というところに対応しているというところでございます。

あと、今日のようなリスクコミュニケーションを関係府省と連携しながら、大学生の方の授業の中での出張リスクコミみたいなこともやっておりまして、学生向けのそういう放射線教育、特に食と放射能という観点での放射線教育ということは、消費者庁としても積極的に取り組んでいるというところでございます。

さらにもうちょっと年齢層の低い親子向けのイベントなんかで、食品安全全般の普及啓発、啓蒙をしていくという中で、その一環として食と放射能といったところも取り上げているといった取り組みもしています。

さらに、自治体等で学校を対象に食品と放射能関係のリスクコミュニケーションの授業なんかやられるといった場合には、御支援をさせていただいて、食と放射能 Q&A という、こんな資料を消費者庁でも毎年改訂してるんですけれども、そういったものを使っていたりとか、そういった形での御支援もさせていただいていると。正しい知識の普及という観点ですね、様々なチャンネルを使っていく中で、学校というところもターゲットにしながら、引き続き今後とも取り組んでいきたいというふうに思っております。

#### ○葛西氏（コーディネーター）

ありがとうございました。

皆様、たくさんの御意見、御質問、本当にありがとうございました。時間となりましたので、ここで質問、御意見のほうは終了させていただきます。

本日は「一緒に未来を考える～食品中の放射性物質～」と題しまして、様々な皆様の立場から現状とお考えを伺うことができました。本日皆様のお考えを伺って、震災からまもなく 11 年ですけれども、10 年以上経た中で食品中の放射性物質に関する状況というのは、着実に改善しているということが分かりました。それから、栽培したり飼養・管理しているという食品は、生産、それから出荷の段階では基準値を超えているものは出ていないということも分かりました。

また、流通している食品は全て管理下にあって、科学的根拠に基づいて安全なものしか流通していないですけれども、なぜか消費者の皆さんは安全イコール安心にはなっていないくて、昨年度の調査でも 14.1%、1 割強の方々はまだ産地を気にして、放射性物質が入って

いるんじゃないだろうかと不安に思っているというデータも出ました。私たちですけれども、やはり先ほどもトリチウムのところで出ましたが、得体の知れないもの、漠然としたものというのは不安です。ですけれども、ただ闇雲に怖がるだけじゃなくて、これって何だろうって調べる、それからこっちから出す情報も、より皆さんに分かりやすく理解しやすい形で出していく、相互のコミュニケーションというのが大切だと思います。科学的根拠に基づいて私たちも理解、判断できるような目というのを、もっと養っていく方向になればいいのかなと思います。そういう形で世の中が醸成していくと、より食品に対する信頼感がさらに育っていくのかというふうに思います。

あと、今回は未来に向けてという話しも、生産者の方、事業者の方、NACSの方、皆さんから伺えましたけれども、未来に向けてやっぱり後ろ向きじゃなくて、自分たちがおいしいものを作ってるよ、おいしいものがあるよ、楽しいものがあるよ、どんどん福島に来て、という声にもありましたし、それから、そういうものを実際にお皿の上によりさらにマジックをかけておいしくしていますので、皆さんもどうぞ、っていう前向きな話がありました。ですので、私たち後ろ向きじゃなくて震災から10年、次のステップのフェーズに入っているんじゃないのかなというふうに思います。

次のステップのフェーズに、ちょっと今…質問についてのコメントをお願いします？ちょっとお待ちください。分かりました、私に来たのはこれだけだったんですが、他にもたくさん質問があったということで、皆様、時間の関係でその分に関しては御質問御紹介できなかったということ、大変申し訳ございませんでした。その話だったと思います。たくさん御質問いただいて本当にありがとうございました。話に戻ります。

ですので、震災から10年で今度11年、さらに未来に向けてステップアップして、次のフェーズに私たちも、それから消費者もそういう形で目を養って正しい目で選ぶ方向に行きたいものだなというふうに思います。時間となりました。

パネリストの皆様、それから今日御参加された皆様、長時間にわたって本当にありがとうございました。またたくさんのお意見、御質問、御協力、どうもありがとうございました。これにてディスカッションはお開きとさせていただきます。最後までお付き合いくださいまして、ありがとうございました。

では、マイクを司会にお返しいたします。